

太宰治の「信実」と理想

——『走れメロス』を通して——

岡 田 英 子

目次

はじめに

第一章 『道化の華』と『走れメロス』における信頼と友情の共

通性

第一節 『道化の華』における友情と信頼について

第二節 『走れメロス』における友情と信頼について

第三節 『道化の華』と『走れメロス』の信頼と友情の共通性

第二章 太宰治の「信実」と理想

第一節 『人間失格』に見る信頼と人間観

第二節 『人間失格』と『走れメロス』の「信実」

第三節 葉蔵の罪とメロスの理想

第四節 太宰治の「信実」と理想

おわりに

はじめに

「もはや、自分は、完全に、人間で無くなりました。」と強烈な文
体で自分を否定し、他者を排除し、孤独に徹する『人間失格』の主

人公、大庭葉蔵。この作品に限らず、太宰治の文学には一貫して
“人間の普遍的な罪”とでもいうような暗さの塊が存在している。

その“人間の普遍的な罪”を徹底的に掘り下げ、這い上がる術を知
らなかった葉蔵は、やがてその罪悪感に押し潰され、自らを「人間
ではなくりました」と告白するようになる。作者、太宰治にとつ
て、人間であるための要件とはなんだったのだろうか。また、人間
に何を求め、どういう人間観を持ち、何を理想としていたのか、作
品に見られる人間関係、特に友情を取りあげて考えてみたい。

第一章 『道化の華』と『走れメロス』における信頼と

友情の共通性

第一節 『道化の華』における友情と信頼について

信頼と友情は必ずしも表裏一体とは限らない。昭和十一年処女創
作集『晩年』の中におさめられた『道化の華』には、歪んだ人間関
係の中で奇妙な信頼と友情が成立している。『人間失格』の主人公
と同じ大庭葉蔵が、ここでは無名の芸術家として登場し、その他、
葉蔵と中学時代からの友達で彫刻家の飛驒、そして三つ年下で親戚

の小菅、この三人は不安定な感情の中で三者三様の友情と信頼を築きあげている。

彼は、中学校へはひるとから、そのクラスの首席の生徒をほれぼれと眺めてゐた。首席は葉蔵であつた。(中略) 飛驒は、なんでも葉蔵の真似をした。

小菅は幼いときから葉蔵を見て知つてゐた。(中略) おしやれで嘘のうまい好色な、そして残忍でさへあつた葉蔵を、小菅は少年のころから好きだつたのである。

この様に飛驒と小菅は葉蔵を憧憬し、ある種の尊敬をさえ抱いている。三人を結びつける要因の大部分がこの感情なのだと言つてよい。

しかし、その強い感情は決して純粹で透明なものではない。二人は葉蔵を尊敬しながら、一方では正反対の感情をも持つていた。

これはただ陰口だ、彼等は親友の陰口をさへ平気で吐く。その場の調子にまかせるのである。

ここに全く相反する感情が同時に存在しているのがわかる。軽蔑と尊敬、嘲笑と愛情、この混濁した感情の上に、三人の友情と信頼が形成されているのだ。

ここで特に、葉蔵と飛驒の友情、葉蔵と小菅の信頼関係を取り上げて考えてみたい。まず、葉蔵と飛驒は、芸術を介してつながつて

いた。「よい画がかけたらねえ」と頭をこしこしかいて笑う葉蔵や、いまにいまにと傑作を考えながら、ただそわそわと粘土をいじくる飛驒、芸術への情熱がないわけではないが、そのはげ口を見つめるだけの心の強さを持ちあわせておらず、自分達だけの「芸術」の世界にいつまでも閉じ込もつてゐる二人。つまり彼等の友情とは、外界から自分達の世界を守るためだけに、または、傷つけられないためだけに存在しているのだ。芸術に対するその切実な想いは偽りではない。しかし、それを表現する術を知らず、ただもどかしさのみをもてあましてゐる。そのもどかしさから逃れるためだけに、お互いにお互いを求め合つてゐるのだ。孤独に対する恐怖から、その友情は生まれたものなのだ。

次に、葉蔵と小菅の信頼関係を見してみる。葉蔵と飛驒は、お互い芸術という世界をもち、それを信頼してゐたといつてもよいだろう。では小菅は、何に信頼をおいてゐたのだろうか。彼も芸術にはいささか畏敬のようなものを感じてはいた。けれどそれはすべて葉蔵ひとりに対する信頼から起こつた感情だった。つまり、小菅がただ一つ信頼してゐたものがあるとするなら、それは葉蔵だつたと考えられる。「退屈なこの世のなかに、何か期待できる対象」を求め、「いつも戦慄したくうずうず」し、そして「この白昼つづきの人生に、なにか期待できる対象を感じたい」と思つてゐた小菅にとつて、葉蔵はまさに、「期待の対象」であり、「戦慄」そのものだったのだ。しかし、葉蔵や飛驒よりも新しい世代の小菅は、はつきりと一線を引いて葉蔵を見ている。

しかし、その愛しかたは、飛驒なぞとはちがつて、観賞の態度であつた。つまり利巧だつたのである。ついで行けるところまではついて行き、そのうちに馬鹿らしくなり身をひるがへして傍観する。

つまり小菅は、葉蔵を信頼しながら同時に敬遠もしている。ここに、小菅の葉蔵への信頼は、明らかにさまざまな興味によつて成り立っているのがわかる。

この様に、彼等の信頼と友情は、孤独への恐怖心や明らかさまな興味から端を発している。つまり、彼等の関係はすべて、己を守るために、また、楽しませるために築きあげられたものだったと言える。それ故、彼等三人が理想の三人である時には、無意識の意識が無計画な遊びのすじ書きを造り出す。

三人はくつくつ笑ひだし、いつせいにそつと隣りのヴェランダを盗み見た。い号室の患者も、ろ号室の患者も、日光浴用の寝台に横たはつてゐて、三人の様子に顔あかくして笑つてゐた。

「大失敗、知つてゐたのか」

小菅は口を大きくあけて、葉蔵へ目くばせした。三人は、思ひきり声をたて、笑ひ崩れた。彼等は、しばしばこのやうな道化を演ずる。トランプしないか、と小菅が言ひ出すと、もはや葉蔵も飛驒もそのかくされたもくろみをのみこむのだ。幕切れまでのあらゆるちやんと心得てゐるのである。

即ち、これが彼等の友情と信頼なのだ。彼等の友情と信頼は、人間のエゴと理想の中にひしめき合つている。そして三人は、これらを守り抜くために必死で「道化の華」を咲かせているのではないだろうか。

第二節 『走れメロス』における友情と信頼について

人間の信頼と友情を簡潔な力強い文体で表現した『走れメロス』は、太宰治の作品の中で最も知られているものの一つだと言つてよい。古伝説から題材をとつたこの作品には純粋な感動がある。ここでは、メロスと竹馬の友のセリモンティウスとの友情と信頼を特に取り上げて考えてみたい。

まず、不安や迷いの苦しみに耐え、その中であつてなお、汚されなかつた二人の友情は、この作品の大きなテーマであるといえる。

メロスは、友に一切の事情を語つた。セリモンティウスは無言で首肯き、メロスをひと抱きしめた。友と友の間は、それでよかつた。

即ち、これが『走れメロス』の中の友情なのだ。濁流を泳ぎきり、山賊を撃ち倒したメロスのパワーの源は、まさにセリモンティウスとの友情そのものだったのだ。メロスの健康さと力強さは、この芝居がかつたやうな明らかさまな友情を、敢えて飾らず、直視しているところにあるといえる。決して「気障」だと遠巻きに敬遠など

していない。そういう意味で他作品と比べ異色ともいえるこの『走れメロス』の中の友情は逆に、作者の理想を貫いたものだったとも思える。他作品とのギャップの分だけ、太宰治が崇敬した人間の友情の理想像だったといえるかもしれない。

次に、友情と同じくして大きなテーマの一つに挙げられる信頼について考えてみる。『走れメロス』全体を通してみても、一筋のラインのように貫かれている強い信頼を感じることができている。

セリヌンティウス、私は走つたのだ。君を欺くつもりはみぢんも無かつた。信じてくれ！

セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と一緒に死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがひ無い。

日没までには、まだ間がある。私を、待つてゐる人があるのだ。少しも疑はず、静かに期待してくれてゐる人があるのだ。私は、信じられてゐる。

私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。

私は信頼されてゐる。私は信頼されてゐる。

それだから、走るのだ。信じられてゐるから走るのだ。

このように、各所にぎりぎりの想い、切実な信頼があるのがわか

る。作者が人間に求めていたものは、そして、人間であり続けるために必要だったのは、この様なメロスのゆるぎない信頼だったのではないだろうか。ここに、メロスと王様の会話を挙げてみる。

「市を暴君の手から救ふのだ。」とメロスは悪びれずに答へた。

「おまえがか？」王様は、憫笑した。

「仕方の無いやつぢや。おまへには、わしの孤独がわからぬ」

「言ふな！」とメロスは、いきり立つて反駁した。「人の心を疑ふのは、最も恥づべき悪徳だ。王は、民の忠誠をさへ疑つて居られる。」

「疑ふのが、正当の心構へなのだ、わしに教へてくれたのは、おまへたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もとも私欲のかたまりさ。信じては、ならぬ」暴君は落着いて吹き、ほつと溜息をついた。「わしだつて、平和を望んでゐるのだが」

この会話でわかるように、信じることをやめ、その変わりに権力を手に入れた「王様」は、孤独になってしまつてゐる。権力とは物に依存し、縦に人と人とを結ぶものであらう。そう考えるとするならば、信頼とは人の心の中に依存するものであり、同じ目線で対等につきあえる、人と人とが横につながっているものではないだろうか。それ故、縦のつながりの頂点にたつてしまつた王様は、人を見下すばかりで孤独になるより仕方がなかつたのだ。どちらかを手に

入れれば、どちらかを失ってしまう、信頼と孤独とはシーソーのようなものなのかもしれない。だから、孤独を極端に恐れた作者の理想の信頼を貫くためには、メロスはどうしても走り抜かなくてはならなかった。そして、走り抜いたメロスと、縄をほどかれたセリヌンティウスが、ひしと抱き合うその前で、かつての暴君はこう言わなければならなかった。

「おまへの望みは叶つたぞ。おまへらは、わしの心に勝つたのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかつた。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願ひを聞き入れて、おまへの仲間の一人にしてほしい。」

第三節 『道化の華』と『走れメロス』の信頼と

友情の共通性

この二作品は、書かれた時期に多少ずれがあるため、かなり趣の異なるものになっている。しかし、どちらも友情や人間の信頼を大きく取り上げていることに注目し、敢えて共通点を見つけてみたいと思う。

まず、『走れメロス』と『道化の華』を通して感じることがは、お互いをお互いが引き合う力の強さである。葉蔵や飛騨や小菅は、道化を必死に演じることで、お互いをつなぎとめていたし、メロスとセリヌンティウスを窮地から救つたのもまた、この力だったと言えるだろう。これらは、本質的には同じものであるとは考えられないだろうか。もちろん、この二作品から受ける印象もかなり異なっ

ているように、彼等の友情と信頼の質は、前節で述べたように相違する点が多い。純朴なメロスの友情と信頼に対し、葉蔵や飛騨や小菅の友情と信頼には、どちらとした不透明さが作用している。けれども、ここで、作者が葉蔵や飛騨や小菅を、「僕たちの英雄」と定め、さらにこの三人を強調しているところに重点を置いてみたい。メロスの英雄性については、承知の通りだが、では、葉蔵達三人のどこに英雄性があるだろうか。

まず、メロスの英雄性から考えてみたい。メロスは、竹馬の友、セリヌンティウスに絶対的な信頼をおいていた。同時に、人間の倫理観をも全面的に信じていたとは考えられないだろうか。というよりも、裏切つてはならないものとし、自分が走り抜くことによつて人間倫理の実証を成し遂げようと試みたのだ。そして、それを見事、成し遂げ、王様の心を変えることが出来たからこそ、メロスは英雄となり得たのだろう。忘れてかけていた人間倫理の実証、即ちそれは、人間の善への絶対的な信頼と自信からくるものなのだ。メロスは、自分とセリヌンティウスとの友情と信頼を、人間全体の友情と信頼に置き換え、見事、それが存在することを実証したのだ。この強い人間への信頼感、セリヌンティウス一人からくるものではなく、もっと視野の広い、人間愛と呼ぶようなものからきているのではなからうか。そして、この人間愛こそメロスとセリヌンティウスの強い友情と信頼の源泉なのだと思う。

メロスの健康的な明るさが、強い友情と信頼からくるものだとしたら、葉蔵や飛騨や小菅の不健康さは、歪んだ友情と信頼からくるものだと考えられる。孤独への恐怖からくる友情と、明らさまな興味からなる信頼、ここには人間愛と呼べるようなものは微塵もな

く、どちらかという、人間への不信感といったものが強く感じられる。人間への深い嫌悪感、人間倫理への絶望、それによって孤独になってしまった飛驒は、葉蔵に助けを求め、また、人間への信頼を失ってしまった小菅は、最後の信頼を葉蔵に向けたのだ。切迫したこれらの想いはすべて、失われた人間倫理からくる。英雄、メロスはその強いパワーによって、この実証を白昼のもとに成し遂げたが、葉蔵と飛驒と小菅は、己の内にこれを完成させたのだ。それ故、この三人にあるのは「僕たちの英雄」なのだ。彼等には彼等だけの世界、芸術観がある。メロスの友情と信頼が、人間倫理の実証のためのそれだとしたら、葉蔵達の友情と信頼とは、己の芸術観、自分達の内側にある倫理を守るための防壁だったと言える。人間倫理への激しい絶望に苦しみ、その妥協策として己の中に新しい倫理観を築き上げていった三人。それは、多少、歪んではいるとしても、人間への強い信頼感がなければ成し遂げられるものではなかったはずだ。激しい人間への不信感は、人間倫理実証への強い欲求であり、人間への深い嫌悪感は、満たされない人間愛への渴望なのだ。

メロスとセリヌンティウスが引き合う力と葉蔵と飛驒と小菅を結びつけている力は、このように本質的には人間愛という同じ力であったと考えられよう。メロスが必死に走り抜いたのも、また、葉蔵が一生懸命に道化の華を咲かせたのも、すべて人間愛に至る友情と信頼だったのではなからうか。人間愛から成る友情と信頼は、それ少しずつ形を変え、歪められたり勢いを増したりしながら、お互いを引きつけ合う力の源となっているのだ。

第二章 大宰治の「信実」と理想

第一節 『人間失格』に見る信頼と人間観

これまで、作品の中の人間関係、特に信頼と友情を取り上げてきて、その中には人間愛が存在していることがわかった。ここではそれをふまえ、『人間失格』を加えて、作者の人間観、理想とは何かを考えていきたいと思う。

『人間失格』の主人公にとって、その生涯を通じて信頼していたものがあるとすれば、それは何だったのだろうか。

そこで考へ出したのは、道化でした。

それは、自分の、人間に対する最後の求愛でした。自分は、人間を極度に恐れてゐながら、それでいて、人間を、どうしても思ひ切れなかつたらしいのです。さうして自分は、この道化の一線であつた人間になつてゐることが出来たのでした。

ここで「自分」は「道化」を「人間に対する最後の求愛」といつている。つまり「自分」は人間に「愛」を求めていた。ここでの「愛」は「信頼」と置き変えることができるだろう。では人間に「信頼」を求めていた「自分」は、どのような人間観をもっていたのだろうか。堀木に共産主義の秘密会合につれていかれた「自分」は、そこで「マルクス経済学」の講義をうけるが、その講義について、次のように言う。

しかし自分には、それはわかり切つてゐる事のやうに思はれました。それは、さうに違ひないだらうけれども、人間の心には、もつとわけのわからない、おそろしいものがある。欲、と言つても、言ひたりない、ヴァニテイ、と言つても、言ひたりない、色と欲、とかう二つ並べても、言ひたりない。何だか自分にもわからぬが、人間の世の底に、経済だけでない、へんに怪談じみたものがあるやうな気がして、その怪談におびえ切つてゐる自分には、所謂唯物論を、水の低きに流れるやうに自然に肯定しながらも、しかし、それに依つて、人間に対する恐怖から解放せられ、青葉に向つて眼をひらき、希望のよろこびを感ずるなどといふ事は出来ないのです。

ここで注目したいのは、人間の世の底にある、「経済だけでない、へんに怪談じみたもの」の正体である。作品は前後するが『走れメロス』の中にもこれと似た言葉がでてくる。「もつと恐しく大きなもの」、「わけのわからぬ大きな力」、これらは同質のものとは考えられないだらうか。ここで一つ、はっきりと言へることは、それがたとえ、プラス志向のものであつても、マイナス志向のものであつても、作者の人間観において、人間は、自分自身を本質的につき動かす何か凄まじいエネルギーを一つ、心の中に所有しているという事だ。作品中の言葉で形容するなら「恐しい」そのエネルギーこそ、人間の正体なのだと思ふ。

人間の正体―「もつと恐しく大きなもの」、「わけのわからぬ大きな力」、メロスはこの大きな力によつて最後まで走ることができた。人間倫理の実証はもちろんだが、メロスは走り抜くことによつて、

人間の正体をも追求していたのではないだらうか。そうして走り抜いたメロスは王様との約束を守つた「正直な男」となり、「名誉」を獲得し、ここにメロスの存在というものが周りに知らしめられ、メロスの英雄像が確立されていくのだ。つまりメロスは、自己存在の追求のために走つたのだ。

間に合ふ、間に合はぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいものの為に走つてゐるのだ。

最後まで走り抜くことこそが、メロスにとって自己存在の追求だつたのだ。

自己存在の追求、ある時は必死に走り抜くことによつて名誉を手に入れ、そこから自分自身がなんなのか、見出ししていく。また、ある時は自らを「生まれた時から日蔭者」とし、どこにも自己を見出すことができないために、心の根底に流れる自己存在追求の欲求から逃れようと恐怖する。自己存在の追求は、メロスのようにプラス志向にもなり得るし、逆に、道化へと逃げていって、真正面から己と向き合うことをやめてしまった葉蔵にとっては、「恐怖」以外の何ものでもなくなる。当然、「青葉に向つて眼をひらき、希望のよろこびを感じる」ことなど出来るはずもなく、自然に、マイナス志向となつてしまふ。

人間は、自己存在の追求のために生きてゐる、これが葉蔵の、また、『走れメロス』から貫かれてゐる作者の一貫した人間観ではないだらうか。

第二節 『人間失格』と『走れメロス』の「信実」

『走れメロス』と『人間失格』、メロスと大庭葉蔵、英雄と廢人。この二者の同一性を「信実」の遂行に見ることができるよう思う。「信実」とは、「まじめで偽りのないこと」とある。まず、メロスも葉蔵も、お互いに「信実」を「この世で一ばん誇るべき宝」と最も高いところに位置付けていることに注目したい。この「この世で一ばん誇るべき宝」という一文は『走れメロス』中のものだが、『人間失格』の葉蔵にもあてはまるだろう。メロスは走り抜き、英雄になることで「信実」を手に入れ、そして葉蔵は、自我を失い廢人になることで己の中の「信実」を守ろうとしたのだ。この二者は、お互い、両極端から全く異なる手段で同じものに近づくようにしていたのだ。一つの大きな理想をかかげ、両端から同じ山に登り始めたメロスと葉蔵は、お互いに、同じものを手に入れようとしていたのかもしれない。同質のものを求め、切望していた二人の主人公のこの二つの作品を読み進むと、意外にも『走れメロス』の中の葉蔵、『人間失格』中のメロスを発見することができる。

セリモンティウス、私は走つたのだ。君を欺くつもりは、もちろんも無かつた。信じてくれ！ 私は急ぎに急いでここまで来たのだ。(中略)私だから、出来たのだよ。ああ、この上、私に望み給ふな。放つて置いてくれ。どうでも、いいのだ。私は負けたのだ。

(『走れメロス』より)

自分をしんから信頼してくれてゐるこの小さい花嫁の言葉を開き、動作を見てゐるのが楽しく、これは自分もひよっとしたら、いまにだんだん人間らしいものになる事が出来て、悲惨な死に方などせずにすむのではなからうかといふ甘い思いを幽かに胸にあたためはじめてゐた矢先に、……。

(『人間失格』より)

メロスの喪失感、そして葉蔵の爽快感は、それぞれお互いのもっている資質の断片に類似している。メロスの乱暴で破壊的な告白は、葉蔵の自暴自棄のそれと同じであるし、また、葉蔵が小さな希望を手に入れた時の、この明るさに満ちた爽快感は、「信実」のために走り抜くメロスの義務遂行の力強さと一致する。この様に、両極端な二つの作品であるが、メロスの中の葉蔵性、葉蔵の中のメロスの思想も存在し、相重なる部分もあり、両者が表裏一体を成しているということがわかる。一方は肯定的に、もう一方は否定的に、「信実」を追求したこの二作品は、「信実」の表と裏の姿だと言えるだろう。

『走れメロス』の中の「私は信頼されている」と『人間失格』中の「信頼は罪なりや」は、だからまさに、「信実」を表と裏から直視した二人の主人公の心の叫びであるといえよう。さらに、この「信実」をぎりぎりのところまで掘り下げることによって、二人は英雄であり廢人になったのだ。二人にとって「信実」とはなんだっただらうか。

メロスも葉蔵も、このただ一つの「信実」に異様とも思える程に執着している。ある時は至福の喜びを手に入れたごとくに喜び、ま

た、逆に、極端に恐れたり怯えたりもしている。二人にとって「信実」とは、自分自身の存在すべてだったのではないだろうか。つまり、「信実」とは自分、自分こそ、「信実」をぎりぎりのところまで掘り下げた最後の一線だったのだ。先に挙げたように、人間は自己存在の追求のために生きている、と作者の人間観を定義するとしたら、それは同時に、人間は「信実」の追求のために生きている、ということに他ならないのだ。前節でも述べたように、メロスは自己存在の追求のために走っている。それは同時に、己の「信実」の追求のために走ったということになるのだが、走り抜いたメロスにとって、「信実」とは「信実」を貫き通した自分なのだ。

自己を掘り下げ己の内にある信仰といってもいいような一つの「信実」を見つめた時、葉蔵の中にはその「信実」が自身の中に存在していなかったのだ。正確に言えば、何が「信実」で、自分が何を信じていたか、葉蔵自身がわからなくなってしまうていたのだ。

これが、登りつめた山の頂にあつた「信実」の表の姿、力強いメロスの肯定的な「信実」では、もう一方の斜面から登り始めた葉蔵の否定的な「信実」について考えてみる。葉蔵は、「信実」をぎりぎりの所まで掘り下げることによって廃人になってしまった。それは理想の自己、あるいは「信実」というものが、葉蔵という人間の枠内に依存していなかったためである。葉蔵が東京に出てきてから、生活の場所を何度も変えている要因もここにあるかもしれない。葉蔵は自身の生活場所を変えることで己の中の「信実」を捜しあてようとしていたのだ。東京に上京してきてからの葉蔵の生活場所を追ってみる。

まず葉蔵は、東京の高等学校に合格し寮生活に入るが、すぐに父

の別荘に移っている。しかし、家の事情から本郷森川町の仙遊館という古い下宿に引越すが、カフェの女給との心中事件をきっかけに、父の友人であるヒラメの家の二階に寝起きするようになる。けれど葉蔵は、家出同然でヒラメの家を出ると、堀木の家で偶然出会ったシズ子と、高円寺のアパートで男めかけのような生活を始める。が二年も経たぬうちに、京橋のスタンド・バアのママムのところに、または、男めかけの形で泊り込むようになる。一年ちかくそこで生活していた葉蔵だが、バアの向いの煙草屋のまだ十七・八のヨシ子と結婚し、隅田川の近くの木造の二階建てのアパートの一室でふたりで住み始める。しかし、その後、ヨシ子が犯され、ショックを受けた葉蔵は、自殺を試み、そして最後には、モルヒネ中毒となり、脳病院へ連れていかれる。その後、東北の温泉地で廃人のような生活を続ける。

この様に、葉蔵は、常に一定の場所に落ち付かず、特に、心中事件以後は、「いたたまれなくなつて」ふらふらと生活場所を変えている。空虚な生活と、自己の空虚さをもてあましていた葉蔵は、一種の切迫感のようなものから、一つ所に定着することができなかつたのではないだろうか。葉蔵の一生のうちでその切迫感を満たしてくれるもの、空虚さを埋めてくれるものがあるとするなら、それはヨシ子の存在だと言える。正確に言えば、ヨシ子の無垢の信頼心だ。男めかけのような生活をしてきた葉蔵が、ただ一度、自分の意志で決めたことが、ヨシ子との結婚であり、ただ一度、京橋のスタンド・バアから、隅田川のアパートに移る時は、しっかりとした足どりだったのだ。ここに、葉蔵の自己存在は、ヨシ子の無垢の信頼心によって確立されている。つまり、ヨシ子の信頼によって葉蔵は

「信実」というものを己の枠内につなぎとめておくことができたのだ。

ああ、よごれを知らぬヴァジニティは尊いものだ、(中略)結婚しよう、どんな大きな悲哀がそのために後からやつて来てもよい、荒つばいほどの大きな欲楽を、生涯にいちどでいい、処女性的美しさとは、それは馬鹿な詩人の甘い感傷の幻に過ぎぬと思つてゐたけれども、やはりこの世の中に生きて在るものだ、結婚して春になったら二人で自転車で青葉の滝を見に行かう……。

これは、葉蔵の心情風景だともとれる。自閉を続けていた心を開くことで入ってきた風は、「青葉の滝」のような爽快で透明なものだった。

だから、ヨシ子の信頼が汚されれば、糸の切れた凧のように葉蔵の「信実」は、また、ふらふらとさまよわなければならなくなるのだ。ヨシ子は、無学な小男の商人に犯され、それから後の葉蔵の生活は一変し、再びおもむくところはアルコールだけになってしまふ。泥酔し、自分を見失いながらも葉蔵は、汚された「信実」に、それでもなんとかすがろうとしていたのではなからうか。「信実」と「真実」の間の溝にはまり、葉蔵は必死でもがいていたのだ。

果して、無垢の信頼心は、罪の源泉なりや。

だから、この言葉は、もう一方の斜面から登りつめた葉蔵の、

「信実」への追求の声なのだ。「信実」を己の中に確立しかけたが、それも悉く打ち破られた葉蔵。では、その葉蔵の「信実」の追求はどこに辿り着くのだろうか。

覚醒しかけて、一ばんさきに呟いたうはごとは、うちへ帰る、といふ言葉だつたさうです。うちとは、どこを事を差して言つたのか、当の自分にも、よくわかりませんが、とにかく、さう言つて、ひどく泣いたさうです。

自分は酔つて銀座裏を、ここはお国を何百里、ここはお国を何百里、と小声で繰り返して繰り返して呟くやうに歌ひながら、なほも降りつもる雪を靴先で蹴散らして歩いて、突然、吐きました。

自分は、しばらくしゃがんで、それから、よごれてゐない個所の雪を両手で拗ひ取つて、顔を洗ひながら泣きました。

こうこは、どうこの細道ぢや？
こうこは、どうこの細道ぢや？

哀れな童女の歌声が、幻聴のやうに、かすかに遠くから聞えます。

はじめの文章は、葉蔵が催眠剤を多量に飲み自殺をはかり、三昼夜眠り続けた後に、無意識に呟いた言葉の抜粋で、後の二つは、初めて啞血した時の文章である。

無意識に口をついた言葉が「うちへ帰る」、けれど、「うち」はど

ここにあるのかわからない。それどころか、今、自分がどこにいるのかさう定かではない。故に、哀れな童女の歌声が、葉蔵の心象風景と重なり、幻聴のように聞えるのだ。激しい自己喪失、けれどもそれはメロスの視点で見れば、激しい自己確立への欲求の裏返しと言える。葉蔵は、その自己確立の場を「うち」、あるいは「お国」と言っている。即ち、故郷、もちろん、ここでいう故郷とは精神的な面での故郷ということになるのだが、生まれた時の自分、本来あるべき自分、イコール、理想の、「信実」の自分がいるところ、それが葉蔵にとつての故郷、即ち、「うち」であり「お国」なのだ。故に「信実」の自分が存在する「うち」に「帰りたい」と無意識に啖く葉蔵は、自己喪失からなる自己確立への激しい欲求を無意識に啖いたことになる。メロスが「信実」の追求を、己の内から外側へ外側へと探究していったのに対し、葉蔵は、「信実」を自分の内側へ内側へと見出し出そうとしていたのだ。従つて、葉蔵にとつての「信実」もやはり、自分自身でなければならなかったのだ。

第三節 葉蔵の罪とメロスの理想

これまで考えてきた作者の人間観、「信実」、信頼、そして友情を総合して、「自分」とつての罪とは何か、メロスの理想とは何か、考へてみたい。まず、罪の実体をつかむのに「自分」は、罪の対義語は何か考へ始める。

「罪。罪のアントニムは、何だらう。これは、むづかしいぞ」と何気無ささうな表情を装つて、言ふのでした。

「法律さ」

堀木が平然とさう答へましたので、自分は堀木の顔を見直しました。(中略)

「罪つてのは、君、そんなものぢやないだらう」

罪の対義語が、法律とは、しかし、世間の人たちは、みんなそれくらゐに簡単に考へて、澄まして暮してゐるのかも知れません。

(中略)

「まさか。：罪のアントは、善さ。善良なる市民。つまり、おれみたいなものさ」

「冗談は、よさうよ。しかし、善は悪のアントだ。罪のアントではない。」

「悪と罪とは違ふのかい？」

「違ふ、と思ふ。善悪の概念は人間が作つたものだ。人間が勝手に作つた道德の言葉だ。」(中略)

「しかし、牢屋にいられる事だけが罪ぢやないんだ。罪のアントがわかれば、罪の実体もつかめるやうな気がするんだけど、：神、：救ひ、：愛、：光、：しかし、神にはサタンといふアントがあるし、救ひのアントは苦惱だらうし、愛には憎しみ、光には闇といふアントがあり、善には悪、罪と祈り、罪と悔い、罪と告白、罪と、：：：嗚呼、みんなシノニムだ、罪の対語は何だ。」

堀木とのやりとりで、「自分」が罪というものを、どのように考

えていたか、ぼんやりとした枠組みが見えてくる。まず第一に、罪の本質とは法律や道徳といった既成概念の中には存在しないということ。ではどこに存在するのか。概念や実在を理論的に考える理性の手のとどかないところ、生まれながらの本能の中に、本当の罪を罪だと認識する能力があるのではないだろうか。

「自分」の心の中で、一つの結論めいた言葉が浮かんでくる。

罪と罰。ドストエフスキイ。ちらとそれが、頭脳の片隅をかすめて通り、はつと思ひました。もしも、あのドスト氏が、罪と罰をシノニムと考へず、アントニムとして置き並べたものとしたら？ 罪と罰、絶対に相通せざるもの、水炭相容れざるもの。罪と罰をアントンとして考へたドストの青みどろ、腐った池、乱麻の奥底の、…ああ、わかりかけた、いや、まだ、…。

ここまでで、「自分」の思考はブツリと切れてしまう。ヨシ子が犯されるという事件を知らせに堀木が戻ってきたためだ。これは、罪のアントニムの結論だろうか、思案の中途だろうか。

罪を犯すと罰を受ける。それが一般的な考え方だ。もし、そう考へるとするなら、犯してしまった罪は、罰を受けることによつて償うことができるということになる。だが、これは、法律や道徳の枠の中にある既成概念だろう。本当の罪とは決して、償うことによつて、罰とすり変わったりなどしない、もつと、普遍的なものではなからうか。

『ドストエフスキイ』の中で小林秀雄は、こう言っている。

法律は、血が流された事実について、犯人の罪を認めた。
(中略) ラスコリーニコフ自身は、自負心を持ち堪へられなかつたといふ一点だけにしか、自分の犯罪を認めることが出来なかつた。

つまり、『罪と罰』の主人公、ラスコリーニコフは、殺人を犯した事については「罪」の意識はなく、自首をし、自分の認識の範囲内では「罪」と認められない「罪」を「罪」だと認めてしまったことに、この先、一生償いきれない「罪」を犯したと初めて認識するのだ。ここでは、法律上の罪とラスコリーニコフが認識した罪との違いが、はつきりと出ている。法律にひつかかる罪ならば、罰を受けることで消えてしまうだろう。けれど自分自身の本能にひつかかる罪ならば、それは、どんな罰を受けても消えることはないのではないか。そういう意味で、罪と罰とは、「絶対に相通せざるもの、水炭相容れざるもの」なのだ。

これは、犯罪小説でも、心理小説でもない。如何に生くべきかを問うた或る「猛り狂った良心」の記録なのである。

(『ドストエフスキイ』より)

ラスコリーニコフも、「自分」も、この「猛り狂った良心」で、法律では裁けない罪を感じ取ったのだ。いや、法律では裁けない罪を感じ取ったからこそ、「良心」が「猛り狂っ」てしまったのだろうか。どちらにしても、やがて、その「猛り狂った良心」は、「自分」に自己否定という決着を、要求するようになる。

「自分」の苦しみは、「信実」と「真実」の不一致に他ならない。「信実」を「真実」とすり変えて己を生かすのではなく、「自分」は、己を殺して「信実」を「真実」にしようとしたのだ。自己の「信実」に、「自分」は誠実に生きようとした。けれど、自分の中の「信実」と世間一般の「真実」とのギャップに苦しみ、「自分」は、「信実」を捨てて己を守るのではなく、己を捨てて「信実」を守ろうとしたのだ。前節で、「自分」としての「信実」は、自身でならなければならないと述べたが、「自分」は、己から「信実」を分離させることで「信実」を守り抜いたので。「信実」と己の分離は、即ち廃人意味する。よって、「自分」が、廃人になってまで守りたかったのは「信実」であり、「信実」と「真実」の一致にこそ、理想を見たのだ。

メロスが、自分の命をかけて実証したかったことも、まさにこれだろう。「自分」は、「信実」と「真実」の追求を自己否定によって成し遂げたが、メロスはそれを、王の前で実証したのだ。そうして王様に、「信実とは、決して空虚な妄想ではなかった」と言わせ、ここで晴れて、メロスの「信実」は「真実」となり、メロスの理想は完成されたのだ。

第四節 太宰治の「信実」と理想

ここで、『走れメロス』の「わけのわからぬ大きな力」と、『人間失格』中の「罪のアントニム」を、もう一度考えてみる。両方共に曖昧な、つかみどころのない表現の言葉だが、どちらも、その作品のテーマに成り得る重要な言葉である。メロスは、「わけのわか

らぬ大きな力」によって走り抜き、葉蔵は、「罪のアントニム」は何か、かなり真剣に考えこんでいる。それぞれの主人公にとってまさに、源動力の核ともなっているものなのだ。

「わけのわからぬ大きな力」は、前節で述べた通り、自己存在の追求、つまり、「信実」を追求すること、というふうに定めるとしたなら、「罪のアントニム」は、どう定めることができるだろうか。

本能の中にその「罪」はある。つまり、道徳や法律に関係なく「罪」というものは存在し、その「罪」を「罪」だと認識するのは本能であり人間なのだ。既成概念というものさしではなく、人間が生まれた時からもっている、人間というものさし、つまり人間倫理。

この人間倫理こそ、「罪のアントニム」に一番ちかい言葉ではないだろうか。

ラスコーニコフは、独力で生きているのではない。作者の徹底的な人間批判の力によって生きている。

この文章は、小林秀雄の『ドストエフスキイ』中のものだが、そのまま、葉蔵に当てはまるものだと思う。太宰治は、自らの徹底的な人間批判の力によって葉蔵を生かしていた。というよりも、徹底的に人間批判することで、己の「信実」をふるいかけ、わずかに残った「信実」が、葉蔵だったのだ。だから、太宰治の「信実」とは葉蔵であり、その葉蔵が理想としたものを実証したメロスこそ、太宰治の理想なのだ。

メロスは途中、疲労のため激しい脱力感に襲われ、それを救った

のが小さく覗くように湧き出ていた清水だった。太宰文学の中で、また、忘れかけられていた理想の人間の倫理観にとって、『走れメロス』はまさに、作者の「信実」から覗くように湧き出た透明な清水だったとは言えないだろうか。

文中の引用は、次のものによる。

『走れメロス』 『太宰治全集』（平成元、筑摩書房）3巻

『晩年』 『同右』1巻

『人間失格』 『同右』9巻

『ドストエフスキイの生活』 小林秀雄著、講談社

〔評〕

太宰治『人間失格』は、若い人たちに、人間倫理に関する深い考察を迫る秀れた作品のようである。卒業論文のテーマとしてよく取り上げられる作家の一人であるが、その中で、稀にそういった秀れた論文に出会うことがある。岡田さんの論文も、まさしくそういう意味で秀れた論文である。

本論の独自性は、「走れメロス」と「道化の華」・「人間失格」という一見非常に異った作品に、作者の人間倫理追及の一貫した姿勢を読みとるといふ点にある。それが、また作品内の表現の共通性を指摘しながら進められているところに、大きな説得力が生じている。その過程で、「人間失格」の読みにも新しい視界を開いていると言える。

（青木 美保）